
ボクシング最強伝説 2nd

Fake

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボクシング最強伝説 2nd

【Nコード】

N5291T

【作者名】

Fake

【あらすじ】

たった一人の友達と、自分の拳しか信じられない15歳の少年。
拳を奮う事でしか自分を確立出来ない、黒澤流星家庭も学校も何処にも居場所の無い彼が、拳のみで世界の頂点を目指す。ボクシング最強伝説第二章。

始まり（前書き）

全てフィクションです。実際の固有名詞と同様でも一切関係ありません。

始まり

その少年の瞳は、どす黒く濁っていた。少年はミディアムのストレートヘアーの金髪に、学ラン。

童顔であり、普段ならば中世的な美少年であろう。

だが、降りしきる豪雨の中、周りには血まみれの男達が、呻き、喚き、苦しみもがいていた。突き刺さるような雨は、稲光に照らされる少年と、周囲のチンピラ達を、容赦なく叩き付けていた。

「こいつらもよええ……。5人でかかってきてこんなもんか……。」

金髪の少年は、ツバを吐いてその場を去って行った。立ち上がることも出来ない不良達は、ひたすら助けを待つだけであった。

||
||

「加藤……。木山……。黒澤……。黒澤……。おい。居るなら返事しろ！」

金髪の少年、黒澤流星^{くろさわはやと}は、窓際の机で頬杖をついて、グラウンドを見ていた。グラウンドでは、他クラスの生徒達がサッカーをやっている。

ここは、流星が通う中学校、源氏中学。そして、流星の名を呼んでいるのは担任だった。担任が怒鳴る。

「黒澤！やる気がないなら帰れ！お前みたいな屑は源氏の風紀を

乱すだけだ。」

流星はその「言葉」が許せなかった。机を蹴飛ばし立ち上がる。クラス中の生徒が下を向く。担任は、怯えだし、「な、殴るのか？」と言った。流星は担任の目の前に立ち、死んだような目で一言。

「今・・・、クズ・・・って言ったか？」

担任は震えている。

「あ、ああ・・・そうだ！クズ！お前みたいな傷害に窃盗！その内殺人も犯す様なクズはこの学校に要らない必要ない！クズ！クズ！クズがああ！」

その瞬間、担任の顔面に流星の右の拳がめり込んだ。ぐにやりとした感触。そのまま右手で相手の首を掴み、178cmの身長で、片手だけで担任を持ち上げた。そのまま黒板に叩きつけ、膝蹴りを叩き込む。クラスメイト達は全員が逃げ出し、担任は動かなくなった。

すぐに他の職員が集まり、血だらけになった流星の担任を見て、警察を呼びに行く。生徒指導の教師でも流星だけは手が出せず、怯える一方だった。流星は、

「どけ。」

とだけ言って、教室を立ち去り、学校もたち去って行った。学校を出て向かったのは、親友の柿原海斗かきはらかいとの家だった。海斗は、引きこもりで流星とは全く正反対の性格だった。海斗の母、知美は、流星の事をよく知っており、笑顔で迎え入れた。エレキギターの音が聞

こえてくる。流星は微笑んだ。海斗は背も低身長で、運動音痴だが、ギターの腕前は中学生とは思えないレベル。部屋をノックし、流星は彼の世界へと足を踏み入れた。

部屋の中は、世界の名ギタリスト達のポスターや、CDだらけ。ギターの雑誌は山ほどある。海斗は微笑んで流星に声をかけた。

「また喧嘩したのかい？今度は誰と？」

海斗も慣れているので、笑っていた。しかし、今回は流星の様子が違う事に気がついた。

「山口・・・半殺しにしちまった・・・。骨は確実にイッタし、死んだかもしれねえ・・・。」

海斗は神妙な顔をした後、口を開いた。

「あの言葉・・・言われたんだね・・・。」

流星は頷かなかったが、海斗には分った。流星が最も嫌いな言葉、忌み嫌う言葉、「クズ。」

流星は小さい頃から虐待を受けて育った。父親は、酒にギャンブル、煙草に女、その上まったく働かない。流星の母親を毎日殴り、蹴り、「クズ！クズ！」と怒鳴りつけた。流星が小学5年の時、母親は、父親の暴力で死んだ。父親は、刑務所に入るのを恐れ、未だに何処にいるか不明だった。

流星は児童擁護施設に入れられ、中学3年の今まで育ってきた。施設の中でも力が絶対だった。流星は笑わない子になった。相手が

中学生でも、腕っぷしの強さで叩きのめしてきた。無表情で人を殴るようになっていた。人を殴りたいのではなく、殴ってしまう。爆発してしまいそうな、自分の底のどす黒い感情が、噴火しそうになると、同類の人間にそれをぶつけていた。

海斗と出合ったのは中学一年の時。同じクラスになった流星と海斗だったが、海斗は見た目の貧弱さから、入学早々虐めの対象になった。最初は見知らぬ顔をしていた流星だったが、ある日泣いている海斗のノートや教科書に

「クズ」

という言葉で埋め尽くされているのを見て、流星は海斗を虐めている生徒達は全員病院送りにした。海斗は学校に来なくなったが、流星は、毎日家に通った。お互い口数等ほとんど無いが、海斗は流星にCDを聞かせたり、ギターを弾いてみせたりして、過ごしていた。

「年少か……。それもいいかもしれないねえ。海斗のギターが暫く聴けなくなるけどな。」

流星は親友の海斗にしか見せない可愛らしい顔で笑った。海斗がギターを元の位置に戻した。

「流星が少年院に行くなら、僕も誰がぶん殴って一緒に入っちゃおうかな。ギター弾けなくなるけど。」

流星は馬鹿言ってるじゃねえと言いながらも笑っていた。海斗は苦笑いを浮かべた。その後、流星は警察の厄介になるものの、担任は全治2ヶ月で命に別状は無く、クラスメイト達はこぞって「黒澤

君は悪くない。」と言っていたのを邪険に出来ず、流星は無罪になった。なぜ、誰とも交流のない流星を皆がかばったのか。それはただ単に黒澤流星の恐ろしさを知っていたからだ。流星は気持ちが悪かったが、

「まあ、ありがてえ。」

そう警察に言っただけだった。その後は流星は学校に全く行かなくなり、施設を抜けては夜の繁華街で喧嘩に明け暮れていた。そんな時、寒気がする程の殺気を放つ男に出会った。身長は自分より低いが、坊主頭に漆黒のスーツ、レイバンのサングラスをかけている。3人をあっという間に倒してしまった流星を見たその男は、

「ほう……。」

と言った。

「なんだよおっさん……。お前もやるか？あ？」

坊主の男はサングラスを取り、笑いながら近づいて来た。流星は生まれて初めて恐怖した。

「こいつには勝てない。」

自分の中の潜在意識が、そう語りかけてきた。

「殴ってみろ。小僧。」

流星は、切れのある動きで坊主頭に殴りかかっていた。坊主は、全てのパンチや蹴りを簡単に受け止め、笑っている。流星は腰に夕

ックルを決め、持ち上げようとした。しかし、その瞬間、流星は地面を見ていた。ふわりと浮かんだ身体は、地面に叩きつけられた。背中に激痛が走る。ゆっくりと流星の上にマウントポジションをとったその男は、流星に紙を差し出した。流星の目の前に出されたのは名刺だった。

「金子工業 代表取締役 かねこげんじ 金子元治」

流星は坊主の男の顔を見た。知っている。昔、海外の異種格闘技に出ていた空手の達人だった。この金子との出会いが、黒澤流星をボクシングの世界に誘う事になるのである。

リングの上で

「そんなに腕に自信があるなら、プロボクサーでも倒せるか？」

流星の上に乗ったまま、ニヤリと笑う金子。流星は怪力で金子を退かそうとするが、相手はびくともしない。

「ボクサーだ？あんなもん、ルールに縛られた、くだらねえお遊びだろ。喧嘩なら負けねえなあ。」

金子の威圧感も、既に流星は跳ね返し、威勢を張った。しかし、実際流星はボクシングに強さも魅力も何も感じていなかった。すると金子が立ち上がり、「立て」とジェスチャーした。流星は立ち上がって、金子を睨みつける。

喧嘩では一度も負けたことの無い流星。大人のチンピラ相手でも負けたことはない。そして今日の前にいる相手にも負けたとは思っていないかった。金子が構える。流星は瞬時に思考した。

「ボクシングか。おっさんは空手の達人だろうが。まあ、どっちでも・・・いいけどよお！」

と、流星は我流のパンチと蹴りを金子に叩き込みに行くが、金子は横にスッと動き、攻撃をかわす。先程は攻撃をさばかれたが、今度は金子は全ての攻撃を巧みに避ける。流星の攻撃は、全てが全力だが、スピードもある。素人では絶対に避ける事等出来ない動きだった。

流星が息を切らし立ち尽くす。金子はオーソドックススタイルを

取り、革靴を履いているにも関わらず軽やかなフットワークを取り続ける。そして近づいて来た。

「一応、俺もボクシングをやっている。しかし、ボクシングではB級ボクサーにも歯が立たない。お前、俺の知り合いの世界チャンプの若い頃に似てるんだよ。その殺る気満々な目がな。」

そう言って、凄まじいハンドスピードの右ストレートを流星の目の前で止めた。その距離1cm程度。流星は動けなかった。そして生まれて初めて負けたと思った。

「どうだ。ボクシング興味ねえか。もしあるなら、ここに来い。毎日やってるらしいからよ。じゃあな。」

金子は流星に一枚のチラシを差し出した。自然と右手がそれを受け取っていた。チラシにはこう書かれていた。

「小松ボクシングジム。練習生募集中。」

流星はそれを見て思い出した。数年前、死神と恐れられた天才ボクサーと、その兄を試合で殺してしまったボクサーの因縁の試合を。当時大変な話題になり、流星も知っていた。結果は死神と呼ばれたボクサーが相手を病院送りにした。そして、その負けたボクサーの友人でもあり、仲間でもあったボクサーが死神に復讐を挑んだ。だが、そのボクサーも、驚異的な強さの死神相手に大怪我をし、ボクサー生命を絶たれた。そのボクサーこそが、チラシに載っているボクシング会長、

「小松秀」

であった。流星はネオン街にふらふらと紛れ込みながら、呟いた。

「ボクシングか……。練習とかめんどくせえしな……。」

流星は施設に戻り、眠ろうとしたが金子の恐ろしい程の強さと、ボクシングスタイルで自分の攻撃を全て避けた事が、頭の中でループし、一睡も出来ずにいた……。

（やっぱ……。いつてみるか。）

そう決めると、自然と眠りにつけたのであった……。

「小松ボクシングジム」

ジムの場所は、雑居ビルの一角にあった。外からジム内が見える造りになっており、想像以上に狭い。必死に練習をしている男達が見える。流星が入ろうかどうしようか迷っていると、肩を叩かれた。

「見学？どうぞ。」

「あ、いや。」

柔和な表情をしてはいるが、小柄ながらも筋肉の塊の様な体つきをしている男に、ジム内へと案内された。流星と男がジム内に入ると、練習をしていた男達が一斉にこっちを向いた。

「会長！こんにちは！」

「おお。続ける。」

流星は隣の男の顔を見た。知っている。死神と対戦した男……。小松ジムの会長、小松秀であった。小松は、流星を見て笑った。

「お前が金子の言ってた奴か。背も高いし、ガタイがいいな。何しろ格闘センスは奴のお墨付きだったしな・・・」

一人でブツブツと呟く小松を見て、流星は鬱陶しいおっさんだと思った。本当にこいつがそんなに強かったのかと。筋肉は凄くても、蹴りを一撃叩き込めば倒せそうな気がした。

「吉崎！ジャブだけでこの若いのとスパーしろ。左ジャブな。」

「はい！」

流星は驚いた。入会どころか体験するとも言っていない。それに流星はスパーの意味も良く分からなかった。

「あのよ。スパーってなんだ？」

小松は目を丸くした。

「お前不良の癖に、スパーも知らねえのか？スパーはスパーリングの略で、ヘッドギア付けて、試合形式で殴り合いすんだよ。お前ボクシング舐めてんだろ？今準備してる吉崎は、この前C級を取ったばかりだ。実力的には現在では並。吉崎に勝てたら、お前に土下座してボクシングは弱いです。って言ってやるよ。その変わり負けたらうちのジムに入れ。」

小松が凄んだ。小松も若い頃はただの不良で、ボクシングを舐めていた。しかし、ある時フィットネス上がりのボクサーに叩きのめ

され、プロボクサーになった。そしてボクシングの魅力に取り付けられていったのである。小松にとっても、ボクシングを愚弄する者は許せないし、友人の金子から、有望株だと聞いていた若者の実力を見たかったのである。

流星は笑った。

「C級って4回戦ボーイとかいうやつだろ？負けるわけがねえ。素人同然じゃねえか。体重は俺の方があるぞ？いいのか？」

流星がリングに上がっている吉崎を見ながら笑った。吉崎は身長170cmのフェザー級の選手。流星は178cm70kgである。小松は問題ないと言い、流星にウォームアップをさせようとしたが、

「そんなもんは必要ねえ。」

そう言って、リングに上がらせろと言う。ジム内のプロや練習生は苦笑いだった。小松に、蹴りはもちろん、拳のナックルパートのみで戦う事を命じられた。流星は一撃で終わらせるつもりでリングに上がった。3分2R。スパーク開始。

流星は喧嘩パンチで吉崎に乱打を放つ。吉崎は足を使う事もなく、流星の思いパンチを膝のクッションでガードし、威力を反らす。吉崎はほとんど動かず、流星に殴らせまくる。一見、吉崎が押されているように見えるが、一つもクリーンヒットはない。流星の無尽蔵のスタミナも1分が経過した所で早くも切れた。そして、流星に拳の嵐が襲いかかる。素早くて確かなジャブの連打が、流星の美形を赤色に染めていく。口は切れ、鼻血が止まらず、呼吸が出来なくなる。流星はガードしたが、サイドに回りこまれ、ひたすらジャブを打たれる。

その時、流星の頭の中で嫌な思い出が甦った。孤児であるが故、学校で集団でリンチされた事、鼻血を出して、どれだけ叫んでも誰も助けてくれなかった事を。・・・何かが、きれた。

「くそがあ！」

流星の右の豪腕が吉崎の顔面を撃ち抜いた。そして、ひたすら連打でパンチを浴びせる。一撃で吉崎の意識は飛び、倒れ伏した。

「はぁ・・・はぁ・・・見たか・・・ボクサーなんてな・・・素人でも・・・勝てるんだよ・・・。」

そう言ってリングを降りようとした流星はガクリと膝から崩れ落ちた。吉崎のジャブは顎を集中的に狙っており、脳を揺さぶっていたのであった。小松が流星に語りかける。

「俺はお前に似てる奴を知ってる。昔は俺もお前と同じだった・・・。お前向いているよ。間違いなくお前はダイヤの原石だ。素人殴っても刑務所しか行けねえ。だけど、リングで殴りあったら金ももらえる。そっちの方が良くねえか？」

流星は立ち上がれず、小松を見上げて言う。

「きつい練習はやりたかねえからな・・・。」

小松はニヤリと笑うと、流星に肩を貸した。かつて日本ランカーでもあった小松秀。金子元治との出会い、そして小松秀との出会い、ここから彼はプロボクサーへのスタートラインを切る。

進路 立花美優

流星は、小松ジムで初めてスパarringを知り、ただの喧嘩ではなく、スポーツとしての殴り合いを経験した。それは自分にとって稲妻が走るかのような衝撃であり、殴り合いをしている時は全てを忘れられる流星にとっては『聖地』の様に感じていた。

流星は親友の海斗にプロボクサーを目指す事を伝えたと、彼は非常に喜んだ。流星の腕っぷしの強さ、折れない心、そして、本当は誰よりも優しく、そして『生きる事』がどれだけ辛いかを知っている流星。海斗は流星なら必ずプロボクサーになれると信じていた。そして、入場曲は自分が作るのだと。

「かっこいいやつで頼むぜ。」

屈託なく笑う流星に、海斗はギターをかき鳴らせて頷いた。

ジムの会費は小松会長から、「お前の足長おじさんから貰ってるから必要ない。」と言われた。それじゃ困る。自分で仕事して払うと言ったが、小松は、

「その分を練習に費やして、最短でプロになれ。まだプロテストを受けるまで2年もある。それまでにプロになるのはもちろん、ライセンス所持の時点で6回戦を圧倒出来るまでになれ。そうでなければ、足長おじさんも俺も、お前の面倒は見ない。」

と言われた。流星は納得しなかったが、なぜ、こんな自分にここまでしてくれるのか・・・それを考えながら、黙って頷いた。

流星は、ジムに入門してから学校にまた通い始めた。それは会長の「義務教育だけは最低でも受けておけ。」という言葉からだ。冗談じゃねえ。勉強なんか糞くらえだと怒ったが、嫌なら辞めるか？と問われ、しぶしぶ通うことになった。

だが、ある日、また流星が事件を起こす。それは進路希望調査の結果の事だった。以前、流星が殴打した担任が大声で怒鳴る。

「黒澤！お前ふざけてるのか！」

流星はズボンに手を突っ込み、ボーっと担任を見ていた。クラス中が凍りつく。また何か起こるのではないかと……。すると担任が流星の席までやってきて、紙を机の上に叩き付けた。

「プロボクサーだ！？貴様！喧嘩したいがために、ボクシングを習い始めたらしいな！今度は、何処の中学、高校と揉める気だ！？本当にお前はく……」

クズ。担任がそう言おうとした瞬間、後ろから口を押さえられ、右腕を捻られて身動き出来なくなった。

「いい加減にしろよお前。プロボクサーは職業だろう。クズクズ言う、お前の方がクズなんだよ。男の癖に中学生相手にボコボコにされやがって。お前の方がダサイんだよ。」

担任の手首を取り、左手で後ろ首を掴みながら言葉を吐きつけているのは、ショートカットの茶髪に、目は大きく、釣り目の少女だった。

「た・・・立花！お・・・お前は、女版の黒澤と一緒にだ・・・はな・・・」

そういう担任の腕がさらに締め付けられる。立花と呼ばれた少女は全く表情を変えずに、大の大人の男に悲鳴を上げさせた。腕はビキビキと嫌な音を立て、もうすぐ折れるという瞬間に、流星が立花の腕を無理矢理引き離した。

「先生よ。俺はもう喧嘩なんかしねえ。喧嘩より面白そうなもん見つけたんだよ。だからお前の迷惑にはならねえ。どうせ俺は高校には行かねえから、万が一傷害起こしても、卒業後なら関係ねえだろ。」

流星は立花を見ながら言った。担任は腕を押さえながら、教壇に戻る。

「黒澤流星！立花美優！卒業まで、お前ら嚴重に見張るからな！わ、忘れるな！」
たちばなみゆう

流星はその言葉を無視して、立花美優と視線のやり取りをした。流星も美優も決して目を反らさない。先に席に戻ったのは美優であった。

流星は考えていた。「立花美優」身長165程で、すらっとした体系。自分と同じでクラスの誰とも交わる事もなく、女子の不良達とは、彼女が通ると皆が道を空ける。何かの武道をやっているらしく、男の不良数人も倒してしまう程の強さだった。流星は自分と似ているとは思ってはいいたが、別段意識した事はなかった。

その日の下校中、後ろから流星が呼び止められた。振り向くと、

立花美優が無表情で歩いてきた。

「俺は礼なんか言わねえぞ。」

流星がそう言っても、美優は表情を微塵も変えなかった。

「そんな事はいいい。お前程の不良が喧嘩より楽しいっていう、ボクシングってのは、そんなにいいもんなのか？」

顔に似合わず、口調は普通の男より汚い。流星はなぜそんな事を聞くのか不思議になった。

「そうだな。ボクシングってのは、ただの殴り合いじゃねえ。全身を鍛えなきゃいけないし、とにかく馬鹿じゃ出来ねえ。勉強は出来なくてもいいらしい。だけどよ、めっちゃめっちゃ頭使うんだ。俺は、まだスパリングもやらせてもらえねえけど、相手がどう動くか、それに対してこっちがどう動くか……。喧嘩はやみくもに殴って蹴ればいいけどよ。ボクシングってのは。」

流星がそこまで語ると、美優が微笑んだ。流星は初めて見たその可愛い笑顔を見て、ドキリとした。柔和な表情で美優が語る。

「黒澤がそこまでべらべら喋るなんて、よっぽど楽しいんだな。いいなあ、そういうの。私は、ただの不良女だからよ。やる事もねえから高校は行くけど。そうか。それで最近のお前、顔つきが変わったんだな。頑張れよ！」

そう言って立花美優は自転車で流星を追いついて行った。

「立花か……。あ、そーいや……。」

流星は海斗の家に向かった。

「え！立花さんと話したの？」

海斗は立花美優に恋をしていた。彼女は外見だけで言えば芸能界にも入れそうぐらい美人であり、海斗は面食いであつた。だが、流星が美優の事を話すと、「やっぱり怖いね・・・。」と尻こんでいた。

ジムの練習は厳しい。流星は一月は基礎体力作りメインを命じられている。自宅からジムまで10kmあるので走ってジムまで行く。そして、ロープ、ステップイン、アウト、サイドステップ、鏡でのフォームチェック、ボディーワーク。ひたすら同じ事を何度も何度も繰り返す。打って良いパンチは左ジャブのみ。左ジャブのみをひたすら、打つ。ミットやサンドバッグは、小松のジムではすぐには叩かせてもらえない。

まず流星がぶつかった壁は、ジャブを打つ時のステップイン。トレーナーからは、ジャブを打つ時は、右足で蹴って前に出るのと同じ時に左を素早く出す。その時に右足をズっては駄目で、ほぼ同時に前足と後ろ足が前に出ないとならない。なぜならば、ジャブを打ち、それを引くと同時に、右足のつま先、膝、腰、肩を回して打ち込むのが右ストレートであるから。

そうトレーナーに言われても、喧嘩で変な癖が付いてしまっている。なかなか流星にはそれが出来なかった。毎日の練習で歩けないぐらい筋肉痛だが、彼は負けなかった。練習は嫌いと言いながらも、リングに上がりたいという気持ち、絶対に折れない心を持つ彼は、更に高みを目指していく。

数年前の英雄達

流星がボクシングを始めて一月が経った頃、親友の海斗はボクシングに関する情報をネットで集めていた。自分の親友が喧嘩以外で拳を振るう事に、親友としての喜び、そしてあいつならやれるだろうという嬉しさでいっぱいだった。海斗はボクシングに興味は無かったが、親友の進む道を知るために情報を集めだしたが、知れば知るほどその凄まじいスポーツ、否、格闘技。そして先人達の事を知った。

流星の所属しているジムの会長、小松秀。彼は日本チャンプの沼崎透也と激戦の末負けた。しかし、小松秀の兄である小松翔との対戦で、長きに渡る因縁の対決に終止符が打たれた。

敗れた沼崎透也は、警察官とボクサーの二束の草鞋を脱ぎ捨て、180を超える身長を活かし、日本人では歴代で一人しか世界チャンプになっていないミドル級の頂点を目指した。元々フェザーでは実能力を活かせていなかった沼崎は、ミドルに転向する事により、スピードは落ちたものの、凄まじいパワーでKOの山を築き上げ、苦勞しながらも世界のベルトを巻いた。現WBAミドル級世界チャンプであり、2度防衛中である。

そして、無敗だった沼崎を倒した小松翔は、フェザー、スーパーフェザー、ライト、スーパーライトと4階級を制覇した。日本人としては初めて、そして今現在、ウェルターも制覇しようとしている。あまりの比類なき強さに、なかなかマッチングが出来ない程であった。

それから、かつてボクシング界を一番賑わせたのが、戸田弘樹、

山崎海威というWBA、WBCのチャンプ同士の統一戦であった。テレビでの視聴率は50パーセントを超え、東京ドームの外にまで巨大スクリーンが造られ、チケットを取れない者達がそこで熱狂した。

結果は、11Rまでもつれ、戸田弘樹の必殺のボディ打ちと、山崎海威のカウンターの伸びる右ストレートが、交錯し、戸田の横を掠めた山崎の拳を横目に、えげつない威力のボディ打ちが叩き込まれ、山崎はゆっくりと倒れた。必死で立ち上がろうとしても、山崎は立つことが出来ず、戸田弘樹のKO勝利となる。

その後、戸田は引退を宣言し、山崎も同じようにボクシング界を去った。まだ二人は若かったので、世間からはブーイングが飛んだが、戸田と山崎は、

「一番やりたかった事」

をやり遂げたので、満足だった。しかし、ただ単に二人は選手を辞めた訳ではなかった。海斗がそれを調べていくと、驚く事が分かったのである。小松翔や沼崎がボクシング界に居ても、やはり二人のヒーローの引退はファンの数を激減させた。今、ボクシングの人気はかなり低迷していた。

「今日からミットを持ってやる。ジャブの踏み込み、打ち込み、引き、右のガード、フォーム、軸、気をつける。基本が出来なきゃ応用は出来ないからな。打って来い。」

小松会長が流星に初めてミットを構えた。流星は、リズムを取り、全身をリラックスさせ、強く後ろ足を蹴り前へ飛び出す。物を掴み、そしてひっぱるような感覚で左の拳を放つ。

「パン！」

小松は、流星が放ったジャブに驚きを隠せなかった。普通素人は、たった一月程度では、ここまでのレベルのジャブ、そして軸がぶれず、下半身も安定したステップありのジャブは打てない。まぐれかもしれないと思った小松は、距離をとり、一番遠くで当たる位置に流星に打たせる。

「パン！」

もう一度、

「バン！！！」

威力が増していく。小松は驚いた。まだジムを創設して数年だが、教えることがない練習生などいなかった。ましてやまだ流星は15歳。そしてボクシング歴は一月な上にシャドーでのジャブしかやらせていない。それが、文句の付けようがないレベルだからであった。

「次はジャブ、ジャブ、押し込むジャブを打て。三つ！」

小松が命令した。ジャブを2発素早く打った後、押し込むジャブ・
・左ストレート。流星は黙って頷いた。

「パパン！パン！！！」

ミットへの衝撃が凄まじい。そして、三つのパンチを打っても、流星はフォームを崩す事はなかった。こいつは化ける。小松は思った。やはり、金子の読みは当たりだった。こんな才能を刑務所に持

っていくのはもったいない。小松がニヤリとした。彼はジムの時計を見て、そろそろだと思った。

「うっす！小松！」

ジムの玄関から大きい声が聞こえてきた。背は流星よりかなり低い。だが、練習生やプロ達が羨望の眼差しで男を見ていた。普通の30手前の男にしか見えない。だが、流星も何処かで見た事のある顔だった。テレビだったか、雑誌だったか・・・。

「あいつが元WBA、WBC統一王者の戸田弘樹だ。」

小松がそう言って、何処にでもいそうなその男を指差した。流星の頭の中で、試合の映像が蘇る。テレビで観た。ボクシングに興味はなかったが、とにかく日本中がお祭り騒ぎになったあの試合の勝者、紛れもない、小松秀の親友であり、ボクシング界のエースだった、戸田弘樹であった。

元世界王者

戸田弘樹の突如の来訪で、小松ジム内は騒然となった。練習生はおろか、現役のプロ数名も手を止めて戸田の姿を見つめる。小松が大声で叫んだ。

「今回は、特別コーチで戸田弘樹さんに来て頂いた。俺の旧友だ。元WBA、WBCライト級統一王者だ。お前ら運がいいな。今日練習に来なかった畑中は馬鹿だな本当。」

畑中とは小松ジム唯一のライト級日本ランカーであり、日本タイトルマッチが決定している。しかし、酒癖、女癖、煙草、練習嫌いというどうしようもない選手だが、生まれ持った才能は他の選手とは雲泥の差であった。

「小松会長。『さん』なんて付けないでくださいよ。気持ち悪いじゃないですか。」

戸田弘樹が笑う。すると小松も笑い返した。

「お前も丁寧語なんて使ってんじゃねえよ。」

二人が談笑している姿を見て、選手達や流星もこの二人がどれだけ親しい仲なのかが容易に理解出来た。流星はただ、昔の王者の姿をみつめていた。

（こいつが、世界一強かった男。俺の蹴り一撃で倒れちまいそうだが。）

流星は何を思ったのか、戸田に近づいていくと、ミドルキックを放った。凄まじい回転とスピードのある蹴りは戸田の脇腹を抉ったように見えたが、瞬時に流星の顎をアッパーが寸止めされていた。流星の蹴りより、戸田の反応、スピードの方が速かった。

「おいおい。ボクサーがボクシングジムで蹴りつかっちゃ駄目だろ。俺でさえ、ストリートの時はパンチだけで勝負してたぞ。」

戸田と流星の互いの顔面の距離は5cm程度。戸田のとてもない威圧感に、流星は金子に感じた畏怖を思い出した。

「伝説とまで言われた奴が、俺程度の蹴りもらって倒れる程度じゃ、尊敬もクソもねえからよ。」

流星は必死で表情を変えず、戸田に言い切った。戸田は数秒、流星を睨んだ後、笑い出した。小松が流星のテンプルをミットで殴った。が、それは戸田が止めた。

「小松も面白い逸材見つけてきたな。いい目つきしてる。それに曲がりなりにも結構有名な俺に、蹴りを叩き込んでくるなんて、アホか天才かのどっちかだ。小松、ミット貸せ。おい、不良、ちょっとパンチ打ってみろ。」

小松は呆れながらも戸田にミットを渡した。手招きされた流星はリングに上がる。

「パンチは何処まで習った。」

流星はジャブだけだと答えた。すると戸田は言った。

「じゃあ、打って来い。」

戸田が構える。流星は打ち込む。右足の親指は最初は皮が何回も剥けた。どれだけ痛くても、小松に言われた通り、もう思い出せない程のジャブを繰り返してきた。思い出しながら、流星は戸田のミットに速く、重いジャブを叩き込む。打ってはすぐに引く。インパクトの瞬間だけに力を込める。戸田は驚いた。凄まじく重く、強いジャブに。なぜならば、ステップイン時の左足に完全に体重が乗っているのだ、ジャブといえど牽制のジャブとは言えない。流星のジャブならば、布石どころか、相手にダメージも与えることが出来る。戸田はそう感じた。

「もうジャブはいい。教える事がない。次は右だ。右ストレート。小松に教えてもらってないんだよな。ちよつと見てろ。」

戸田はそう言うのと、ミットを外し、ステップインからのジャブ、そして流れる様な世界一のワンツートを披露した。小松が無言でミットを拾い、戸田のワンツ会受到ける。

ジム内には静寂が訪れた。現役選手が思う。

「レベルが違いすぎる」

戸田がワンツートを5回程打ち、流星に指導する。ワンツートというのは基本中の基本ではあるが、ジャブ3ヶ月ワンツート1年という言葉葉があるように、もっとも大切なコンビネーションである。戸田はそれを説明した上で、右を打つ時に、後ろ足をずりながら右を出すのではなく、ステップインは前足と後ろ足がほぼ同時に出了たと同時にジャブを出し、左足で踏ん張ってバランスを崩さず、後ろ足のつま先、膝、腰、肩、全てを回転させ、右の拳に全体重を乗せ、打ち

抜く。理論的にはそうではあるが、簡単に出来るものではないと戸田は説明した。

ミットを持っている小松に、流星は戸田のワンツートをイメージし、言われた通りに叩き込んだ。ジャブ、踏ん張り、半身を回転して・
・右で打ち抜く。

「スパーン！」

小松がバランスを崩した。ジムの連中や、戸田、小松も驚きの色を隠せない。かつてのボクシング界のエース、戸田弘樹と小松秀は、とんでもない逸材をみつけてしまった。

「お前、本当にボクシングは初めてか。」

戸田に聞かれた流星は、黙って頷いた。

〓〓

事務所で小松と戸田は会話していた。あの後、結局、黒澤流星は、左フックまでマスターしてしまった。他の練習生も戸田が直々に教えたが、皆、そこそこであった。しかし流星は違った。フック等普通はそうそう打てるものではなく、喧嘩パンチになってしまいがちである。だが流星は体の中心軸がぶれず、半身を動かす事が非常に上手く、簡単にマスターしてしまった。

「いいのが来たな小松。」

「ああ。負けん気もすげえし、身体能力が俺の兄貴並に優れてる。あいつのワンツートは、驚異的なものになるだろうな。・・・まあ黒澤の事は良いとして、お前と山崎は今、何してんだよ。まだ30前

だろう。復帰はしねえのか。お前らがいきなり引退しまうから、兄貴は強すぎて面白くねえって言われるし、沼崎が引退したら今のボクシング界やばいぞ。」

戸田は無言で小松の煎れたお茶を飲み、一呼吸置いて話し始めた。

「俺も、山崎も子供がいる。お父さんってくつついてくるのは今だけなんだよ。それにマスコミがうるさい。俺と山崎・・・海威の家族はまともに外も歩けない。もうかなり経つのに未だに俺達に復帰しろと言う。今はWBCのライト級は仙崎カルロス。WBAは野山信二が王座を守っている。しかし、カルロスは生粋の日本人じゃないと言うだけでボクシングファンからは疎まれ、野山は努力でチャンプになったが、教科書通りの動きでつまらないという。」

戸田はお茶をもう一口飲んだ。

「面白いとか、面白くないとか、ハーフだから、KO率が低いから・・・。そんな下らない理由でボクシングから離れるファンのために、試合をしていたんじゃない。俺も海威も強くなりたくて頂点を目指した。KOがボクシングじゃない。ハーフだから日本人ボクサーじゃない、応援したくないと言う・・・。そんな奴らの前で俺はボクシングしたくないんだよ。海威はどう思ってるのか知らない。だが、あの黒澤という子供。才能も、絶対に折れない心も持っている。あいつがボクシング界を背負っていけばいい。お前が育てればいいんだよ。小松。たまには顔を出すから。」

そう言って戸田はソファから立ち上がった。小松は何も言う事が出来なかった。確かにボクシングはKOが全てではない。試合に至るまでの選手たちの努力は凄まじい。小松自身、減量で苦しんだ事もある。基礎練習はたとえ世界チャンプになっても続けなければ

ならない。そうしてやつとの思いで試合を組んでもらい、四角い闘技場に向かう。戸田が呆れるのも仕方がないだろう。小松はそう思った。

そして・・・3ヵ月後。異例の速さで、流星はプロテストを受けることになる。この低迷しきったボクシング界に流星は旋風を巻き起こす事が出来るのか。

プロテストの相手は日本王者

「おいおい・・・ふざけんじゃねえぞ・・・。」

流星はプロテスト当日になって、ある事を知った。それは、「プロボクサー」になるためのプロテストではなく、小松が用意した擬似的なプロテストであった。流星は満15歳であるがため、17にならなければプロテストは受けられない。ならばなぜ、「プロテスト」と小松会長が言ったのか・・・。

「マジで俺がやるんすか？タイトルをちよちよいと取っちゃったこの畑中隼はたなかじゅん様が。」

流星を見て笑っているのは、先月日本ライト級チャンプとなった畑中だった。日焼けサロンに通っているのか、肌は不自然に黒く、長髪の黒髪に白のメッシュ。ピアスの穴が複数空いており、腕には何かの模様のタトゥーが刻まれている。顔はギャル男という部類に入る。

真面目にジムに練習に来ている練習生やプロ達は、流星が入会して4ヶ月、どれだけこの不良少年が成長してきたかをマジマジと見てきたが、畑中はほとんど練習に來ない上に、他の選手に等興味が無い。だから流星の事を完全に舐めていた。

「こっちが『マジで』だコラ。日本チャンプ如きで偉そうな口叩いてんじゃねえ。」

流星が物凄い威圧感で畑中を睨みつける。口を馬鹿みたいに半開きした畑中は、腹を抱えて笑い出した。小松が言う。

「流星。お前はまだ年齢的にプロテストは受けられない。その間、お前にはアマチュアの試合に出てもらおう。北坂高校にはボクシング部がある。17歳になるまで北坂高校に入学し、アマで技術を磨け。」

流星は大声で叫んだ。

「北坂！？高校なんて行きたくねえし、アマチュアなんてやりたくねえよ！それに俺の成績で高校なんて行けるわけがねえだろ！それならバイトしながら、ここで練習するぜ！」

小松が口を開く。

「畑中に勝ったら、お前は北坂に入学出来る。北坂のボクシング部は弱小だ。お前みたいな逸材は喉から手が出るほど欲しいそうだが、その話をお前の担任にしたら猛反発された……。で、俺が出した条件は、畑中を倒す事。それと、アマチュアはプロボクシングとは全く違うが、アマ出身のボクサーは綺麗なボクサーが多い。確かに安全面を考慮し、華やかなKO等はないが、学ぶものは多い。」

流星は思案した。北坂高校はこの辺では最低の偏差値だが、真面目に勉強もしておらず、不登校の彼が入学出来るレベルにはない。しかし、アマチュア等やりたくはない。ヘッドギアなんて俺には要らない。それよりも、目の前にいる馬鹿が気に入らなかった。

「はは！お前北坂にも入れねえ程、頭悪いのか。しかも、俺に勝ったらって。お前、相当担任から嫌われてるな。俺は将来、世界を取る男だぞ。ぷ。」

流星が畑中の襟首を掴む。にやけたままの畑中。凄まじい気迫で言葉を放つ。

「何が世界だ馬鹿野郎……。お前みてえにたまにジムに来て、まぐれで日本チャンプになったやつが偉そうに言ってるじゃねえぞ……。俺はお前より、まだ練習生でも他の先輩達や4回戦、6回戦の先輩達の方が尊敬してるよ……。調子にのんなギャル男野郎……。」

流星の物凄い握力に畑中は畏怖した。自分の中の本能が「危険」というシグナルを鳴らしている。だが、曲がりなりにもジムの看板である畑中は、流星の手首を掴んで離れた。

「いいねえ！お前みたいな生意気なクソガキは、リングの中で合法的にぶちのめしてやるよ。会長、早くゴング鳴らせよ。」

小松は流星の言葉に驚いた。一匹狼だった不良少年が、ジム生を誉め、努力を怠るチャンプを罵ったのである。人間としての成長に喜びを感じながら、小松は二人に準備をさせた。流星は現役の選手たちともスパーを始めて一ヶ月。4回戦には互角以上の戦いを見せた。なによりも身体が柔らかく、ディフェンスが上手い。ディフェンスが上手い選手はプロになってからも寿命が長いと言われている。そして防御が上手ければ、カウンターが狙える。攻めに転じても彼は無尽蔵のスタミナから、綺麗なコンビネーションを打てる。小松からすると、畑中とやりあっても、もしかするともうという思いがあった。だが、無論日本チャンプに勝てるとは思っていない。

「流星の事を考量して、14オンス、ヘッドギアあり。2R2分で行う。ジャッジは俺と、佐竹、山田、レフリーは俺がやる。」

小松がそう言うのと、畑中はヘッドギアを他の練習生に偉そうに付けさせ、グローブをはめさせた。しかし、床に何かを叩きつける音がした。皆が音の方向を振り向くと、そこには流星が叩き付けたグローブがあつた。

「冗談じゃねえ。8オンスでヘッドギアなし。3分4Rにしてくれよ会長……。14じゃこいつをすぐにぶちのめせねえだろ……。」

畑中が舌なめずりした。

（本物の馬鹿ガキだ。二度とボクシング出来ねえ身体にしてやる……。）

畑中は狡猾な男だった。レフリーにはばれないように反則、ギリギリのバッティング、故意のローブロー、実力でも充分に強い選手であるのに、対戦してきた相手を何人も壊してきている。前回のタイトルマッチでも二回反則を行っているが、レフリーには取られなかった。

「馬鹿は馬鹿同士で好きにやってろ。どっちが大怪我しても俺は知らん。流星のルールでいいな、畑中。」

「OKですよ。」

二人はリングの上で対峙した。まだ15歳の不良対20歳の現役日本チャンプ。戸田弘樹が見抜いた逸材は、この男を相手に何処までやれるのか。今、ゴングが鳴り響いた。

ライバル

ゴングと開始に流星は強烈なステップで、いきなりの右ストレートを畑中の顔面へと打ち込んだ。ファーストコンタクトで単発ストレート。しかも、全力の一撃を放つのは、ど素人か、人並みはずれた度胸か、自信があるか。はたまた・・・。

小松を含め、観戦している者は思った。畑中は不意をつかれ、見事に強打を受けた。流星は、鼻血を流す畑中を物凄い形相で睨みつけ、大振りの左フック、右アッパーを打ったが、それは畑中に肩の動き一つで避けられた。

畑中也スイッチが入り、ジャブからの右ストレート、左ボディブローと、基本コンビネーションを流星にお返しした。右を打ってガードが戻っていない流星は、全てのパンチをモロにもらってしまう。両者共に血の気が荒く、自分を制御出来ないタイプである。

しかし、ボクシングは「喧嘩」ではない。スポーツであり、格闘技である。流星がまだ、それを理解出来なくとも、既に成人して日本チャンプの畑中が同じレベルにあるのは、ボクサーとして恥ずべき事だった。

開始30秒。乱打戦となったが、流星と現役チャンプのスパarringは、もはや喧嘩。互いに大振りのパンチを振り回しているだけで、ボクシングとは呼べない。その時、激が飛んだ。

「流星！俺とのスパarringやれ！」

「そうだ！ボクシングをやれば畑中さんにも勝てる！」

叫んだのは、流星とスパ―をここ一月相手してきた先輩プロボクサー達だった。畑中は「畑中さんにも勝てる」という言葉に、さらに憤怒し、激しい猛攻を見せる。

対して流星は、先輩たちの思いの籠もった言葉を聞き、普段のスパ―での動きを思い出した。そして我に帰る。

（力まかせに打って来た時は・・・木下先輩にはこうやった。）

流星は、連打を放つ畑中の強烈な左フックをウィービングで避ける。そのまま右足の膝を曲げ、同時に上体を捻り、相手の脇腹へ入り込み左足を通常スタンスに戻す。既に半身は捻っており、目の前には畑中の左脇腹がある。「しまった。」と思った畑中の左脇腹、肋骨へ躊躇なく全力で右フックを叩き込んだ。

「ぐが・・・」

畑中の動きが止まり、その場に倒れこんだ。目を見開きリング上に転げ回る。

「いてえ！いてえよ！救急車！」

これがジムの看板の日本チャンプの姿か・・・と、小松や他のプロ達も思った。

「骨が折れようが、死にそうになろうが、子供の様にわめくボクサーなんか要らんわ！引退しろ！」

小松は畑中の怪我の具合は、肋骨にヒビが入っているだろうこと

を確認して、病院へおくって行く事にした。ボクシングは、試合中、どれだけ苦しくても、痛くても、辛くても、顔に出してはいけない。出せば相手に状態を読まれてしまう。基本中の基本であり、流星も喧嘩してきた不良達にもこんな情けない奴は見た事がなかった。半ば呆然自失である。

流星は、とりあえず今日は帰らされる事になった。ジムの帰り、先輩達に拍手で誉められ、不器用に

「あ・・・ありがとうございます・・・。」

と言ったのだった。人に挨拶をするようになったのも小松ジムに入ってからだった。もう季節は12月。流星は施設を出て、金子が借りてくれたボロアパートで一人で暮らしている。結局ジムに入ってから4ヶ月。学校には通うようにしていた。ジムの月謝やアパートの家賃を金子が払う代わりに、学校に通うという約束を取り付けられたからだった。

畑中の肋骨を砕いた感触を思い出しながら、自室を目指していると、最悪な人物に出会った。本当に偶然だったのか、待ち構えていたのか。それは、流星の敵で、唯一流星と喧嘩で勝負がついていない相手、「さえじまけい冴島圭」であつた。

冴島は長髪のオールバックに黒髪で醬油顔。身長は流星とほぼ同身長、眉毛は細く剃り、鋭い目つきをしている。学ランが余計に冴島の不良っぽさを強く演出している。

「俺はもうお前とはやらねえ。喧嘩したらボクシングが出来ねえ。殴りたきゃ殴れ。」

路地の電柱にもたれかけ、煙草を吹かしている冴島に、流星は言った。そして目の前を通り過ぎようとする。冴島は下を向いたまま、煙草を道路に捨てた。

「言うと思ったぜ。ほう。ドーベルマンが、チワワになっちゃったか。こりゃ笑えるな。ボクシングか……。あんなルールありの殴り合いの何処がいいんだ。」

流星は足を止め、冴島を振り返った。

「今日俺は、現役の日本チャンプに勝った。まぐれかもしれねえ。でも、ガキの頃から誰かを殴る事でしか自分を表現出来なかった俺がいる場所は、『ここ』だって思った。お前は、高校行つて自分のシマの頭になればいい。俺は北坂のボクシング部に入る。」

冴島は笑い出した。何がおかしいのかと無表情で流星は見ていたが、彼はゆっくりと口を開いた。

「……舎弟から全部聞いている。知ってたから4ヶ月も放置しておいてやったんだろうが……。相変わらず頭悪いなお前は。殴り合いでしか……。ほう。そんなにボクシングってのはおもしれえのか。じゃあ、俺も南涼のボクシング部に入つて、お前を殴り殺すとするか……。」

蛇の様な鋭い目で流星を睨みつける冴島圭。それを睨み返す流星。

これから果てしなく長く続く黒澤流星のボクシングストーリーに、この冴島圭が、とてつもなく大きな存在になるのであった。

中学卒業

畑中との激戦の後、流星は真面目に学校に通い、ジムにも通い続けた。

特に問題を起こす事もなく、とりあえず授業には出ていた。ジムの方では、あれから畑中は流星に目もくれず練習に励むようになり、別人のように練習の虫となった。

流星は現役の4回戦、6回戦とスパーを続けたが、やはり実際の試合でキャリアを積んでいる先輩達には翻弄され、ボクシングの厳しき、奥深さを、ひしひしと感じていた。

喧嘩に明け暮れていた夜の街は、いつしか雪が舞い、流星はひらりと舞い落ちてくる雪の欠片にジャブを放つ。なぜ自分はボクサーを目指しているのか。ボクシングをやっている時は、昔の事を忘れられる。しかし、ただそれだけの理由ではない。

別に世界チャンピオンになりたいとも思っていない。目標と言うものがない。数か月前に再会した、札付きの不良、冴島圭も南陵高校のボクシング部に入ると言っていた。そして中学の不良たちから冴島が南陵高校に入学が決まったと聞いた。

だが、流星にとって、冴島はどうでも良い存在であった。

「何か目標がなけりゃ・・・飽きちまうかもしれねえ・・・。」

流星は夜空を見上げて、独り呟くのであった。

「以上！源氏中学第64期、卒業式を終わります。」

流星は無事に中学を卒業した。他のクラスメイト達はわきあいあいと楽しく話たり、女子たちは泣いている者もいる。流星は、そんな若い彼らを尻目に、さっさと学校を立ち去ろうとした。その時、声をかけられた。振り向くと、クラスメイトの立花美優であった。ショートだった髪が、ロングになり、初めて会話をした時より大人びている。

「おう。お前には、世話になったな。お前があの時山口をやってくれなければ、俺は高校に行けなかった。」

流星が珍しく笑顔を見せると、立花美優も他人には見せない笑顔を見せた。

「そんな事は忘れてくれよ。それより、北坂のボクシング部に入るんだってな。私はボクシングは良く分からないが、試合に出たら観に行くからさ。」

そう言って、一枚のメモを差し出した。美優らしくない、可愛いパンダの絵柄の紙である。流星はその場で開けてみると、アルファベットが羅列してあった。

「なんだこれは？」

真剣な顔で流星が尋ねた。美優が目を丸くした。

「私の携帯のアドレスだ。迷惑か？」

「いや、別に迷惑じゃねえ。これ、携帯のメールのやつか。でも俺は、携帯持ってねえぞ。」

美優が更に目を丸くした後、微笑ましく、小さく声を出して笑った。

「まあ、連絡待ってるから！じゃあな！」

美優はそれだけ言うのと立ち去って行った。彼女も一匹狼なのでさっさと帰ってしまった。流星は、彼女の意図が理解出来ず、しばらくぼかんとしていたが、今日から入学式まで思い切り練習するつもりで、ジムへと急ぐ。

校庭を歩いていると、体育館脇で怒声が聞こえてきた。何人かの人だかりが出来ている。180近い身長流星は人混みの後ろから中の光景を見た。担任の山口が、学校で有名な不良集団5人に凄まれている。

「散々調子こいてくれたなこの野郎。てめえのせいで俺たちは全員就職だよ。安い給料で一生中卒だ馬鹿野郎。てめえをぶちのめす、今日を楽しみにしてたんだよ。」

わざわざ卒業式に、金髪にしてきた5人の不良。一人は流星よりも背が高く、お互い意識し合ったことはあれど、喧嘩をした事はなかった。昔の流星なら素通りした所だが、人混みをかき分け、リーダー各のガタイのいい奴に声をかけた。

「くだらねえ奴ぶち殴って、くだらねえ人生歩んで、余計くだらねえだろ富樫。一発入れたら失神するようなおっさん虐めてんじゃねえよ。」

富樫祐樹とがしゆうきと手下4人は流星の方を向いた。手下4人は流星を見て震えたが、富樫は笑っている。

「黒澤てめえ。格好つけてんじゃねえぞコラ。貴様ちよつとボクシングやってるからっていきがりやがって。お前だって山口を病院送りにしたことあるじゃねえか。俺らの事は放っておけよ。」

流星と富樫が睨み合う。山口はその隙に逃げ出した。富樫は、山口よりも流星を倒してしまった方がスッキリすると切り替えた。

「もう前の話だ。俺はボクシング始めてから、人を殴ったことはねえ。それじゃあな。」

後ろを向いて立ち去ろうとする流星に、キレた富樫が殴りかかってきた。流星は低くしゃがむと、そのまま両手で富樫の上体を持ち上げて投げ飛ばしてしまった。背中から落ちた富樫は、眉間に皺をよせ、立ち上がって拳を振り上げてくる。流星は、

（仕方ねえ）

そう思い、パンチをウィービングで避けてレバーに左フックを打ち込んだ。富樫の顔色は真っ青になり、呼吸が出来ない。そのままうずくまった。

「正当防衛だからよ。」

流星はそう言って、中学を後にした。まさか卒業式で喧嘩をするはめになるとは思っていなかった。それを遠目で見ていた担任の山口は、更生してくれた流星の事を喜んでいた。初めプロボクシング

ジムから連絡が来た時は驚いたが、みるみる表情や態度が変わっていく流星に喜びを感じていた。

不良Ⅱカス

全ての不良が悪ではない。不良と呼ばれる子供たちが全員が全員根っからの悪ではないし、なりたくてなったわけじゃない者もいる。そう山口は感じたのだった。

流星は帰りに親友の海斗の家に寄った。卒業証書を海斗にも手渡した。彼は、都会の音楽の専門学校に通うという。引き籠りだった親友が、外の世界に出るだけで流星は嬉しかった。立花美優にアドレスを教えてもらった話を海斗に教え、お前メールしろよと言ったが、非常識すぎると怒られてしまった。別に好きならいいじゃねえか、堅い事を言うなよと、流星は言ったが、海斗に常識について説教されるのであった。

流星は、プロボクサーとも手合わせをしているので、北坂高校のボクシング部の連中は目になかった。しかし、そこに盲点がある。プロのルールとアマチュアのルールの違いに・・・。

高校ボクシング

中学を卒業した流星は、北坂高校入学までの間、ジムで全てのスケジュールを埋めるつもりでいた。しかし、卒業式が終わり、勢いよく小松ボクシングジムに飛び込んだ流星は、会長から驚きの言葉を受けた。

「今日から、俺から連絡が来るまで、ここには来るな。代わりに、北坂高校のボクシング部に毎日通え。」

流星は小松の言葉が微塵にも理解出来なかった。なぜ、弱小ボクシング部に毎日通い、JBCに加盟しているジムに練習しに来てはならないのか。

「会長……。意味がわからねえんだけど……。」

小松は表情一つ変えない。100%言われるだろう台詞だったからである。小松は、静かに答えた。

「なぜジムには来るなと言ったか。それは北坂のボクシング部の先輩達や顧問の谷さんが教えてくれるだろう。特にお前が入学した時に3年となる長谷川という選手。すぐにスパーをする事になり、俺が語らずとも全て理解出来る。」

流星はさらに困惑した。弱小ボクシング部ならば、強い選手もいないはず。さらに顧問の名前まで出てきたが、良いトレーナーが居れば、余程の運動音痴でもある程度のレベルにはなるはず。

だが、流星はそれ以上何も聞かなかった。それは小松秀や先輩ボ

クサー達と切磋琢磨し、築き上げてきた信頼感。きつと言葉で言うより、経験がモノを言うのだろう。そう感じ取った。

「わかった。会長。試合は観に来てくれるんだよね？」

「お前が出ればな。」

小松はニヤケた。現役のボクサー達が流星を励ましてくれる。ジムを去ろうとする中、次にOPBFのベルトを狙う畑中だけは流星を睨みつけていた・・・。

――

北坂高校入学式。流石に県内1低い偏差値の高校だけあって、一年生と言えど中学の頃は悪でした。と、態度で現し粹がっている者だらけ。初日であるので茶髪の生徒等はいないが、ブレザーの制服をだらしなく着こなし、ネクタイも捻じ曲がっている者多数。共学なので女子もいるが非常に丈の短いスカートにし、数か月後にはどのような姿になるのか容易に想像出来る。

しかし、とある金髪の長身の生徒が現れると、学内はざわめいた。この近辺では知らぬ者は誰もいない不良の中の不良。黒澤流星。初日であっても、彼は髪の色は変えていない。しかし、制服は正しく着こなししていた。調子に乗っていた不良達も、流星を見ると、目を合わせないように静かに消えていく。そこで怒声が聞こえた。

「おい！お前！一年の黒澤だな！初日からその髪の色はなんだ！」

生活指導の沢村である。柔道部顧問。筋肉質で190近い身長。いかにも体育会系の顔をしている。沢村は北坂高校の不良生徒達で

も、簡単に殴り飛ばされる相手である。この学校では世間で言う「ゆとり」など存在しない。昔ながらの伝統が残っているのであった。

「ああ。茶髪は禁止って書いてあったからよ。金髪はいいんだと思っただけでこなかった。明日、黒くしてくるわ。」

流星は悪気なく答えた。沢村が切れた。

「貴様……。その言葉遣いが教師に対する態度か？」

沢村が流星の襟首を掴んだ瞬間。凄まじい速さで近づいてきた温和な顔の男が現れ、沢村の手首を掴んだ。沢村はその顔を見て、委縮した。

「た……。谷先生……。」

「黒澤流星はうちのボクシング部に入る期待のエースなんですよ。なあ黒澤。明日、ちゃんと染めてくるな？」

流星は沢村が相当の猛者である事は、握力で判断した。そしてそれを制止した谷と呼ばれた見た目は普通のオヤジ。こいつが弱小ボクシング部の顧問か……。思考した後、谷と沢村を見て頷いた。沢村はやや青い顔をして去って行った。

「黒澤。私がボクシング部顧問の谷陽一だ。入学式の後、部室に来てくれ。部室は体育館の裏手にある。」

谷はそれだけ言うと言った。流星は感じ取った。只者ではない。会長の言った言葉がなんなのか、俄然興味が湧いてくるのである。くだらねえ、つまらねえ、そう思っていた高校ボクシング。

高校生活に興味はないが、アマも面白いのかもしれない。そう思い始めた。

入学式の後、流星は自分の教室で周りを見渡していた。真面目そうな生徒は一人もない。皆、今日だけは黒髪だが、だらしない格好だけで普通の中学生ではなかった事が分かる。女子生徒達は流星を見て噂話をしていたが、悪口を言われていると思い、凄まじい眼光で睨みを利かせていた。ただ単に、昔の喧嘩の強さと、ずば抜けたルックスで好意的な噂をしていただけなのだが、流星にとってはどうでもよかった。唯一興味があったのは立花美優ぐらいの事である。彼女は他県の進学校に行ってしまった。この学校の女子達と、美優の顔を思い浮かべると、あいつは美人な部類に入っただなと心の中で微笑んでいた。

担任の話が終わり、入学式が終わった。何人かの不良達と女子達が流星に声をかけてきたが完全に無視した。度胸がある者もいて喧嘩を売ってきた生徒がいても、一睨みすれば道を開けさせる。流星が向かうのはボクシング部の部室。体育館の裏手、プレハブの様なボロイコンクリートで、木の札に「北坂ボクシング部」と書かれている。

流星はその扉を開いた。中には5人の男が立っていた。1人は顧問の谷。他4人は男子。そして、流星の後ろからポニーテールにピンクのジャージを着た女子生徒が入ってきた。童顔で可愛らしい顔立ちである。流星の顔を見て、きょとんとしている。

「お前が黒澤かぁー！早速入部してくれるんだー！」

一人の男が嬉しそうにかけよってきた。誰かに似ている。そうだ・
・戸田弘樹だ・・・。背格好や話し方、そして喋り方まで。流星

はそう感じた。谷がその男を紹介する。

「ようこそ黒澤流星。そいつは長谷川龍之介^{はせがわりゅうのすけ}。ここの主将だ。そしてマネージャーの富田紗枝^{とみたさえ}そして……」

谷が他の部員を紹介しようとした瞬間、長谷川が笑顔でこう言った。

「歓迎会スパーやろうぜ。プロのジムでやってる奴と、俺は試合してみたい！いいですね。先生。」

「しかし長谷川。黒澤はプロのボクシングしか」

そう谷が言った瞬間、長谷川の顔色が陰しくなった。そして冷たい瞳で流星を見つめる。

「お前どうせアマチュアは弱い。プロボクサーと対等にやれる自分がこんなところ……と思ってるだろ。さっさと上がれ。面白い戦いになるから。」

流星は心を見透かされていて多少驚いた。しかし、所詮は弱小のアマチュア、しかも高校生。自分は日本チャンプでさえも叩きのめした。その自信が、流星を憤怒させた。

「上等だよ先輩ボクサーよ。死なねえように、ガードだけはしっかりやってろよ？人間サンドバックにしてやるからよ。」

顧問の谷は無言だった。初めて踏み込み高校ボクシングの世界。初めて戦う「アマチュアルール」のボクシングで、流星は何を体験し、何を見るのか。

長谷川龍之介の實力は如何に。

アマVSプロ

流星はバンテージとマウスピースだけは持ってきていたので、スパーは望むところだった。リングシューズはまだ買っていないが、有名所のスポーツシューズで、非常に動きやすい。

リングに上がる前に柔軟は欠かさない。リング上では先輩の長谷川龍之介が、軽やかなフットワークで素早いシャドーを魅せている。マネージャーの富田紗枝が流星に近づいてきた。

「黒澤君。初めまして。2年の富田です。君の噂は聞いてるよ。うちの部に入ってくれてありがとう。長谷川君は本気で戦うつもりはないから、黒澤君もマスパー程度で動いてね。それから、ルールはアマチュア」

そう言いかけた時、流星が口を挟んだ。

「富田先輩よう。ルールがアマチュアだとかどうでもいいんだよ。あの糞生意気な先輩が1分以内に大の字になって倒れるだけだからよ。俺は雑魚だらけのボクシング部より、さっさと大会に出て強いやつとやりたいんだよ。な？だから黙っててくれよ先輩。」

富田紗枝は流星の言葉と、それを語る「瞳」に驚愕した。まるで野生動物の様な狩りをする時の殺意に満ちた眼光。これが噂に聞いていた不良の中の不良で、すぐにでもプロボクサーになれる逸材。しかし、それはプロでの話。アマチュアとプロは違う。ましてや龍之介は……。そう思っていた。

アマチュアは10オンスのグローブを付けて戦う。流星はプロになったらライト級でデビューするつもりであり、普段の体重は63キロ程度。減量にも苦勞しないタイプである。対する龍之介もライト級だが、アマチュアでは56〜60。龍之介は普段64ぐらいであるが、なかなか落ちにくいタイプである。

顧問の谷がやれやれ・・・という顔でジャッジを務める。一応しつかりと説明はするが、流星は全く聞いていない。すぐに仕留める。それしか考えていない。まだ彼は、未熟であった。

紗枝の「1回目」という言葉とゴングの音と共に試合が開始した。一応3分3ラウンドという形式を取ったが、流星はパワーで龍之介を押していく。押しているように見えるが、ラッシュする流星の拳を、ことごとく、パーリンやフットワークでかわし、隙あらばパンチを叩き込んでいく。龍之介は手打ちのようなパンチで腰は入っていないため、レバーにもらっても流星にダメージはない。

しかし、ハンドスピードの速い龍之介のカウンターが何度も何度も流星にヒットする。

「ヒットアンドアウェイ」

徹底したアウトボクシング。流星の嫌いなタイプであり、まだメタル面」の出来上がっていない流星にとっては冷静に戦えない相手である。流星がどれだけフェイントをかけても、力んでいるパンチは、全て龍之介に見切られていた。一発たりとも流星のパンチはヒットせず。龍之介に面白いようにパンチを当てられる。

ワンツーフックだけで行けると思っていた流星は、ボディを抉り取ってやろうと、深く沈み込んだ。瞬間、谷に割り込まれる。

「減点」

目を丸くする流星。谷が説明した。アマチュアはプロと違い、あまりに深く腰を落とすと反則行為となる。プロのルールでは問題なくとも、アマルールでは反則なのであった。次に頭をくつつけてシヨートから叩き込もうと思った流星。またも谷に止められる。プロでは問題ない、若干の頭からの飛び込みも、アマでは反則となる事がある。

「やりにくい」

流星は段々とイライラしてきた。龍之介はそれを待っていた。大ぶりの流星の右の喧嘩パンチに、用意していた左のクロスを見事に打ち抜いた。顎にまともに入った左は、流星を大の字にマットに沈めた。立ち上がろうとする流星、だが、試合を谷が止めた。

「RSC。1ラウンド1分20秒。長谷川の勝ちだ。」

流星はふらつきながらもまだやれた。しかし、いきなり止められRSCという聞いたことのない言葉を言われ、怒りを露わにした。マウスピースを吐き出す。

「おい。先生。RSCってなんだよ。1回ダウンしたただけじゃねえか。たまたまな。まだやれるから続けさせろよ。」

谷が、じつと流星の顔を見て答えた。

「RFCというのは、レフリーストップコンテストの略だ。プロでは使わない用語だが、お前と長谷川では実力に差がありすぎる。」

下手をすれば大怪我をするし、このスパーリングを続けても今のお前では到底長谷川には敵わない。」

流星は一瞬目の前が真っ暗になった。俺が・・・弱小アマチュアボクシング部の奴に敵わない？実力差？ありえないだろう。会長にも、戸田弘樹にも、先輩にも認められていた俺が、こんな雑魚だらけの高校ボクシングの奴らに敵わないなんて。そして、想いを声にした。

「ふざけんじゃねえぞ。KOすんのがボクシングだろうが。殴り合いで相手をぶっ倒さない、先輩さんみたいな完全な逃げのボクシングなんて、客が観て面白いわけねえだろ。」

ヘッドギアをマットに叩き付けた流星に、龍之介が近づいた。龍之介は温和な顔に戻っている。そして口を開いた。

「これが、アマチュアとプロの違いだ。お前は確かに強いよ。手合わせをしてみて分かった。だが、ルールの違いにより、お前の実力が発揮出来ていないんだ。黒澤の言うとおりKOの無いボクシングは面白く無いという人もいる。だが、強打者とともに打ち合う馬鹿はいない。ただやみくもに相手を殴り倒せばいいのは、ストーリーファイトだけの話。ボクシングはスポーツだ。俺は、いきりたっているだろうお前に、初めに分かっただけで欲しかったんだ。プロルールでやれば、俺は到底お前に敵わない。もし、アマでやりたくなければ、もう来なくていい。谷先生もきっと同じ思いだろう。」

流星は龍之介の顔を見た。謙遜しているが、プロでも通用するレベルだと思う。しかし、倒すパンチではなく、ガードからの返し、そして避ける技術、そしてダウンさせられたカウンター。流星は思い出した。小松会長の言葉を。

「そうか。そういう事か……。ディフェンスの上手い選手は選手生命も長い。アマチュアで修業してこいって事か……。なるほどな。」

流星は独り言を呟いて、にやりとした。部の人間は流星が入部してくる事は知っていたし、恐らく小松の事を言っているのだろうと解釈した。

「入部届、いいすか。谷先生。」

谷や龍之介、他の部員が笑顔を浮かべた。谷はマネージャー紗枝に一枚の紙切れを持ってきたもらうように頼んだ。紗枝が頷いて入部届を持ってくる。

用紙に記入した後、流星から皆に頭を下げた。

「1年の黒澤流星です。一応小松ボクシングジム練習生ですが、会長が戻ってこいと言うまで、お世話になります。それから、長谷川先輩。近い内ぶっ倒しますんで、覚悟しておいてください。」

流星がにやりと笑った。龍之介は微笑んで握手を求め、二人は手を握りあった。

二年のホープ、長谷川龍之介。そして期待の新人黒澤流星。

顧問の谷は、今年は団体戦もいけるかもしれない。そう感じていた。谷自身、ボクシング経験者、経験者程度ではない。北坂高校の新校長が高校ボクシングを昔やっており、弱小の部をなんとかしたいがために去年から引き抜いたのが谷である。

龍之介は現在2年だが、ここまで強くなったのは全て、谷が教え込んだからである。他3名の2年生もそれなりの実力はある。その後1年生は5人が入部してきた。夏の大会に向けて、北坂高校ボクシング部が始動する。

流星のライバル 始動

流星のライバルである「冴島圭」

彼は、最大のライバルである黒澤流星が、お互い唯一取り柄だった「喧嘩」の道を捨ててまで走ったボクシングに興味を持った。

身長は流星と変わらない長身で、黒髪にオールバック。眉毛は薄く細く剃りこまれ、蛇の様な目つきに、ほとんどの者は委縮する。一匹狼の流星とは違い、中学時代からギャングチームの頭を張り、年上すらも力でねじ伏せてきた。しかし、喧嘩をする時は必ず1対1。所謂タイマンだった。

「喧嘩で一度も負けた事が無い。冴島さんより強いかもしれない。」

冴島の耳にその噂が入ってきた時、凄まじい怒りが込み上げてきた。舞台はすぐに整った。流星も自分より強い奴はいない、そう思っていた。だから、冴島の喧嘩を買うのは彼にとっても自然な流れであった。

冴島は部下は誰も呼ばず、人気の全くない河川敷で、上の道路に設置されている僅かな街灯を頼りに二人の対決は始まった。

力は互角だった。普通ならば、お互い一撃で倒れるはずのパンチやキック。タックルを切りに行けば互いに投げ飛ばす。格闘技は二人ともやっていないので、本当に一発狙いの大ぶりのパンチや蹴りを互いに打ち合い、30分以上もの死闘の末・・・。

「黒澤・・・今回預けねえか・・・。」

「ああ・・・。だな・・・。」

二人は互いの実力を認め合い、結局決着は着かなかった。

それから冴島はチームの者達に引き分けに終わったことを告げ、流星には手を出さないように言った。だが、下の者達は、その命令を破り、流星を10人で奇襲し、バットや鉄パイプで凄惨な状態にした。しかし、流星は血を流しながら冴島の所にやってきた。部下達は怯えた。

「冴島てめえ・・・。人数で袋ってやってくれるなおい！」

流星の目は、以前タイマンを張った時のあの流星の目では無かった。

殺される

冴島は背筋が凍りついた。この俺が。ここまで怖いと思った事はない。冴島は部下達を振り返り尋ねた。

「お前らが、勝手に闇討ちしたんだな・・・？」

部下達は怒り狂っている冴島の顔つきを見て、土下座して謝罪した。冴島は落ちていた鉄パイプを拾い、部下全員をその場で殴打し始めた。歯止めが効かなくなり、泣き叫び謝罪をする一人の頭部に鉄パイプを頭上から振り下ろした瞬間、それは止まった。止めたのは流星の右手だった。

凄まじい握力で握りつける右手、そして、流星を睨みつけながら手を振りほどこうとする冴島。

「もういいだろ。お前が命令したんじゃない。とりあえず帰る。年少入るのか？」

流星の言葉を聞いて、冴島は冷静さを取り戻した。殺されかけた部下は、走って逃げて行った。立ち去ろうとする流星に冴島は言った。

「俺は謝罪しねえぞ……。俺が悪いわけじゃねえ……。」

流星は何も言わなかった。冴島は呻いている部下達の声を聞きながらその場に座り込んだ。突然のゲリラ豪雨が襲ってきたが、雨に打たれて冴島は大の字に倒れこんだ。これは中学2年の夏の終わりの頃だった……。

>HR<

「ストップ！」

その凄まじい動きに、南陵高校ボクシング部の部員たちは驚きを隠せない。入部して2か月。毎日練習に来る男、冴島圭。ジムの誰とも交流しようとはしない。南陵は北坂よりも偏差値が高く、中学の時の素行より、学力で取る高校だった。事実進学率は高く、冴島は不良でありながら、勉強も出来るというある意味文武両道であった。

冴島は天性の運動神経の良さで、メキメキと力を付けていた。アマチュアでは、倒れなくても強打を受けると一撃でRSCとなって

しまう。安全性を考慮してだが。しかし冴島の場合、ジャブからの右の威力が尋常ではない。左の使い方も非常に上手いが、右ストリートを躊躇なく相手の後頭部を突き抜ける威力で打ち抜く。

先輩ボクサー達ですら、互角にやれるのがやっとで、冴島は夏の県大会候補となっていた。高校ボクシングはグローブのナックルパ―トに印があり、そこで相手を殴ればポイントが入るので、ほとんどはポイントで勝負が付いてしまうのだが、冴島は完全に倒すボクシングをしていた。打たせても構わず、ガツチリとしたブロックから、射程距離に入った瞬間ジャブを放つ。ジャブは速く重く、開かれたガードに冴島の右が飛び込んでくる。同じ階級でも彼は別格だった。

「黒澤はどうしてんのか……。県大会出てこいよ……。」

そんな事を思いながら、最強のライバル冴島も、喧嘩の道を離れ、ボクシングで流星と手を合わせる事を楽しみにしていた。

夏の県大会へ ボクシングという名の麻薬（前書き）

高校ボクシングは、プロルールより更に詳しくないため、僕の小説でのルールや開催時期、細部等はフィクションだと思って下さい。一応、実際のアマ経験者の友達に聞いたり、調べてもいますが、昔と今では違うかもしれません。よろしくお願いします。

夏の県大会へ ボクシングという名の麻薬

流星が北坂高校に入学して、早くも3か月が経った。ガチガチのプロのファイトスタイルだった流星もアマで勝ち上がりたという強い気持ちから、先輩や、顧問の谷からの厳しい指導をモノともせず、ひたすら練習に励んでいた。プロボクサー相手に引けを取らなかった流星が、あっさりと負けた相手、長谷川龍之介。彼と流星のスパーは目を見張るものがあつた。

既に予選は二人ともクリアしており、お互い県大会出場が決まっていた。本来は二人ともライト級なのだが、お互いが潰し合いをしても仕方がないので、流星はウェルター、龍之介はライトで県大会に出場する。他の部員は、レベルに達してないのもあり、団体戦は見送りとなった。

「よし。今日は上がれ。クールダウンしつかりな。」

谷から威勢の良い声がかかる。狭くも、マネージャーの紗枝がいつも掃除をし、掃除をしてくれているので、部室内は綺麗である。

マネージャー富田紗枝は、父親がプロボクサーであつた。新人王間近というところ、6戦無敗というところでぶつかった相手に2R目に顎を碎かれ、普通ならば痛みで動けなくなるはずなのに、最終ラウンドレフリーに止められるまで戦い抜いた。

結果、顎よりも、致命傷となるもらった右ストレートにより、網膜剥離となり、引退をする事になった。まだ幼かった紗枝でも、父親が男泣きをする姿をハッキリと覚えている。決してボクシングが出来ないわけではない。失明の恐れがあるため、JBCでは安全措

置としてリングに上がる事を禁止されるのであった。

そういうボクサーは大勢いる。実力が凄まじくても不慮の怪我により、それ以上ボクシングを続けられない。中には日本では試合を出来ないからと、海外に渡った世界チャンプもいる。それ程までにボクシングには麻薬の様な中毒性があると言われている。一度はまった何歳になっても続けたい。死んでも構わないからボクシングをしたい。紗枝も今では普通の会社員となった父親が、毎日そう愚痴っていたのをたまに思い出す。

流星と龍之介の姿を見ながら、毎日紗枝は思うのであった。怪我をしないで、二人ともいつかプロボクサーになってほしいと。

視線に気が付いた龍之介が、クールダウンを終えて流星と歩み寄っていく。

「どうしたんだよ富田。ぼーっとして。」

紗枝は突然話を振られて驚いたが、

「二人がイケメンだから見とれてた。」

と笑顔を見せた。龍之介は流星と肩を組んで笑った。しかし流星は二人に頭を下げるとバスケット部のシャワー室に無言で向かって行った。

「まったく、流星は本当、心許さないよな。練習の時は納得いくまで何度でも聞いてくるし、喋りだしたら止まらないのに、練習終わったら、はい、用済みみたいな感じでさ。都合の良い男なんだな俺は。」

と龍之介がおねえ風に言うと、紗枝は腹を押さえて笑った。龍之介は実力もあるが、ムードメーカーでもあった。紗枝はそんな龍之介に惹かれていたが、自分の父親と同じファイトスタイルの猪突猛進型、無口、似た雰囲気を持つ黒澤流星という後輩の存在も気になりだしていた。

龍之介は紗枝に想いがある。しかし、自分の中でのある結果を出すまでは告白をしないと決めてあった。とにかく、タイトルを獲得。特に今年の夏、個人優勝するつもりである。それだけの実力がある事は彼自身も分かっていた。だが、慢心ではない。常にチャレンジャーの気持ちであった……。

流星がシャワーを浴びて、体育館の横を通った時、誰かが走って来る音がした。視線を向けると、見たことのない柔道着姿の端正な顔立ちの女子生徒が現れた。流星を見て微笑んでいる。流星は知らない人物なので無視して通り過ぎようとした、その時、

「黒澤。久しぶりだな。」

声に聞き覚えがあった。もう一度、柔道女子の顔を見た。誰だか分からない。しかし、女性でこの喋り方をするのは一人しか思い浮かばなかった。

「立花・・・美優？」

女性は頷いた。顔立ちが穏やかになっており、髪は中学時代よりかなり短く、後ろで束ねてあったので全く分からなかったが、中学の時同じクラスだった立花美優だった。数か月会ってない間に別人の様に美しくなっている。

「なんでお前……。お前、時世館に進学したのに、何でこんなところで柔道やってんだ。」

流星が驚いて尋ねると、美優は答えた。

「時世館は進学校だけど、部活禁止じゃないぞ。私は勉強も力でも男に負けたくないからな。本当は黒澤みたいにボクシングとか、出来れば総合をやりたいが、柔道も悪くない。いや、むしろ実家の武道よりはまっているよ。」

顔の綺麗さと喋り方がギャップがありすぎるので、流星はつい、小さく笑ってしまった。何がおかしいと問う美優に、流星は何でもないと言った。

「黒澤は既に有名だ。ほら、私の後ろを見ろ。数少ないうちの女子部員も、お前目当てで練習試合に来ている。顔だけ良ければいいってもんでもないんだけどな。黒澤。」

そう話している美優も通り過ぎる色んな男子達に見られている。皆、流星の恋人だと勘違いしており、あまり見ると殴られると噂して通り過ぎる。

「お前さ……。いい顔してんだから、あんまり喧嘩すんなよ。」

美優に真面目な顔で言う流星。そこに恋愛感情は皆無。

「いい顔なんてしてないよ。それにもう喧嘩は出来ないだろ。何かやらかせば一発で退学だ。だから柔道で男もぶん投げてストレス発散なわけだよ。」

流星はその言葉を聞いて声を出して笑った。

「立花らしいぜ。」

流星の笑顔等見た事が無かった美優は驚いた。元々女性顔で、綺麗な顔をしていたが、微笑むと心を動かされる、優しい気持ちになる笑顔だった。ちょっと前まではそんな事は無かった。自分と同類だと思っていた元クラスメイト。不良だらけの北坂高校で、何が彼をそんなに変えたのか、自然とそれが知りたくなる。髪も真っ黒にし、ジャニーズ系で、非常に爽やか。

「ボクシング。これに出会わなければ、俺は・・・今頃ヤクザか、刑務所に入ってたか、どっちかだろう。ボクシング始めて、色んな奴に負けた。すげえ悔しかったから、絶対に勝ってやるところで、必死に練習した。正直ボクシングの練習はきついなんてもんじゃない。だけど、やれなかった事がやれるようになった時、努力をすれば、やれないことは無いつて分かった。勝てなかった相手にも勝てるようになった。今月、夏の県大会に出場が決まった。立花も来れたら来てくれよ。お前には中学の時、刑務所行きを助けてもらった恩がある。格闘好きなお前に、俺のボクシング観てもらいたい。」

美優は饒舌に語る流星を見て、胸が締め付けられる思いだった。

（本当に良かった・・・。）

心の中で安堵した。別に流星に気持ちがあるわけでもない。ただ、人を傷つけ、人生を棒に振るのは止めて欲しかった。たったの短期間で、人はここまで変わるものなのかと。うれし涙が出そうになったが、自分を女とはおもっていない美優は涙を堪えた。

「おう。大会頑張れよ。また連絡してくれ。」

そう言って美優は立ち去って行った。流星は思い出した。卒業式の日、美優に連絡先を覚えてもらった事。

「柔道か……。古武道に柔道。何処まで男なんだろうな……。」

流星は呟きながらも、美優の笑顔が、脳裏から離れなかった。

――

「長谷川龍之介。去年の3大会、全て出場。全て個人では決勝で敗れている。しかし、今年の春は欠場。アマチュアでの腕は全国トップレベル。17になったらB級ライセンスを取れる実力者。それが、お前の初戦の相手だ。冴島。」

南陵高校ボクシング部でのミーティング。弁を振るうのはITボクシングを叩き込む顧問の古川。かつて日本ランカーだった元プロボクサー。彼も怪我により、リングに立てなくなった男。

「そんな奴は問題じゃねえよ先生。俺に勝てるわけがねえ。それより黒澤がウェルターってのが気に食わねえ。まあ、先は長いからいいけどよ……。」

古川が冴島圭の前に立った。

「お前、ボクシング舐めてんのか。」

眼鏡をかけたインテリ系、顔は細長く、高身長。しかしその目つきは鋭く、冴島でもたじろぐ程である。

「すいませんでした……。どうしても黒澤とやりたくて、本当、すみません。長谷川、必ず勝ちます。」

頭を下げる冴島。古川が続けた。

「まあ・・・お前と黒澤の因縁は知ってるから気持ちは分かるけどな。ボクシングは喧嘩じゃない。お前もう分かるだろ。南陵の練習で一回も根を上げてないのはお前だけだ。普段俺は誉めないが、お前は正直すごい。だが、長谷川は別だ。RSCなんて狙うな。PTSで良い。ハンドスピード上げて、ガード固くして足を使え。打ち合いには応じるな。分かったな。」

「はい！」

流星のライバル、冴島圭、龍之介はそのライバルと初戦でぶつかる事になる。いきなりトップ同士での潰しあい。試合は想像を絶する展開となる。誰もがそう思っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5291t/>

ボクシング最強伝説 2nd

2012年1月11日10時53分発行